

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22330055

研究課題名(和文) 国境の植民地サハリン(樺太)島の近代史：戦争・国家・地域

研究課題名(英文) Modern History of the Sakhalin Island (Karafuto), as a Borderland Colony: Wars, States and Regions.

研究代表者

原 暉之(HARA, Teruyuki)

北海道大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：90086231

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円、(間接経費) 3,870,000円

研究成果の概要(和文)：サハリン島近代史の全体像の叙述を最終目的とし、その第1段階として日露戦争前後の時期に焦点を当てた論文集『日露戦争とサハリン島』を刊行した。本書は、帝政期ロシア領時代のサハリン島史、日露戦争サハリン戦、国境変動後の住民生活を総合的に描いたはじめての業績である。

また、国際シンポジウムをほぼ毎年開催することで、サハリン島史研究の国際的ネットワークを確立させ、日露間の相互歴史認識の進展にも大きく寄与した。さらに、サハリン島史研究のための資料基盤の共有をおこない、共同研究の基盤構築を進めた。

研究成果の概要(英文)：The end of our study is to describe the Sakhalin modern history. As a first step to achieve this end, we have published the co-works book Russo-Japanese War and Sakhalin Island. It shows for the first time the history of Sakhalin Island from in the second half of 19th century and the beginning of 20th century: the realities of the war, the life of Russian, Japanese and the indigenous peoples before and after the war.

In the course of the study, we organized international symposiums almost every year, so that we have made a strong connection between Japanese and foreign scholars on Sakhalin history. Moreover, we started building the basis of materials on the history for the scholars to share them easily. This project is in progress.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：日本史 ロシア史 北東アジア サハリン 樺太

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの日露関係史研究は、秋月俊幸『日露関係とサハリン島』(筑摩書房、1994年)、木村汎『新版 日露領土交渉史』(角川選書、2005年)などに代表されるように、領土の帰属をめぐる外交交渉史に重点がおかれてきた。これは、日露国際関係の最重要課題が歴史的にも現代的にも領土問題にある以上当然のことといえる。しかし一方で、実際の係争地点である地域認識の把握が後景に追いやられてきたことは否めない。もっとも、ソ連時代の閉鎖的な研究状況において、現地の実態分析が不可能だったことにも理由がある。

だがペレストロイカ以降、現地調査が容易になり、文書館へのアクセスも可能になったことにより、中央政府の政策分析にとどまらない、地域の具体的歴史像の解明が実現できる状況が生まれた。同時に、現地の研究者との交流も活発化し、国境を越えた歴史認識の共有が醸成されつつあった。サハリン(樺太)島についても、北海道大学とサハリン国立大学を拠点とした日露国際シンポジウムが2005年以降毎年のように開催されるようになっていた。

ソ連邦の崩壊は、現地研究者の歴史認識の変容ももたらした。偏狭なナショナリズムにとらわれずに地域をとらえようという態度を生み出し、地域史研究が各地で大きな進展をみせている。なかでもサハリン史研究はそのトップランナーであり、旺盛な研究成果が帝政期サハリン島史を中心に発表されていた。

一方、英語圏ではスタンダードな通史 John J. Stephan, *Skhalin: A History* (Oxford, 1971) の出版から40年近く経つが、これを超える研究は未だになく、地域研究の隆盛の中で、この地域はある種の未踏域をなしていた。

日本国内に目を転ずれば、グローバリズムの進展が国境の相対化を現出させている事

態を受け、中国や東南アジア地域をフィールドとする国境を跨いだ地域間関係や海域史の研究が長足の進展を示す中で、東北アジア地域の歴史研究にも新たな動向が生まれつつあった。

こうした動向の中で、日本海からオホーツク海、北太平洋の海域圏を見通す位置にあり、かつ日本列島に隣接するサハリン(樺太)島の近代史は、ロシア史の一環としてのロシア極東史の研究者だけでなく、北海道史を含む日本史、日本植民地史の研究者からも次第に注目を集めるようになり、政治史、外交史、経済史、教育史、地理学、社会学、文化人類学、文学など、様々な個別専門分野の研究者を束ねる組織的な研究活動とその成果発表が目立つようになった。個別専門分野ごとに本格化の萌しをみせていた日本のサハリン・樺太史研究に総結集の機運が高まっており、こうした流れの延長線上にサハリン・樺太史研究会の発足(正式には2009年4月)があった。今回、本研究の代表者・分担者・協力者として名を連ねる国内の研究者13名は、有志を結集するサハリン・樺太史研究会のメンバーと基本的に重なりあう構成をとっている。

## 2. 研究の目的

サハリン(樺太)島近代史を地域内・地域間・国家間の重層的視角から通時的かつ共時的に検証する本研究は、戦争と領域主権の変更に焦点を当てて、地域内の変容、隣接地域と国際政治との関連性を総合する地域史像の構築を目的とした。

具体的には、戦争によって国境に変更があった3つの時期、すなわち、日露戦争期(1904~05年)、シベリア出兵に伴う北サハリン保障占領期(1920~25年)、日ソ戦争と島民引揚期(1945~49年)を対象時期とする。そして、その前後の時期との連続性・非連続性を視野に入れることで、1850年代から1940年代までのサハリン(樺太)島史を通覧する歴史叙述

を目指すこととし、まず第1弾となる日露戦争期に関する論文集を刊行し、第2弾となる保障占領期に関する論文集の作成準備を開始することが目的となる。

### 3. 研究の方法

全期間を通して国内・国外の文書館・図書館等で各研究テーマに沿った文献調査を実施した。各年度に2~3回の定例研究会を札幌で開催したほか、札幌またはユジノサハリンスクで年1~2回開催された研究会・国際シンポジウムに構成メンバーが研究組織として、または個別に参加した。文献調査と研究会・シンポジウムの開催・参加は、各研究テーマに沿って自主的に実施される日常的研究活動として位置づけられる。このほかに、データベースの構築、国際シンポジウムの開催、出版活動の推進など、研究テーマを横断的に設定され取り組まれるべきタスクに沿って作業活動を実施した。メインの研究組織をなすセクション(班)をテーマごとに編成するとともに、サブの研究組織としてタスクごとに作業チームを編成し、両者をクロスさせるかたちで作業を推進した。

### 4. 研究成果

大きな成果として2冊の論文集、1冊の史料集を刊行することができた。原暉之編『日露戦争とサハリン島』(北海道大学出版会、2011年)は、本研究の最大の目的であるサハリン島近代史通史の第1弾となるものである。分担者を中心に、国内の関連研究者を結集し、重層的かつ学際的にサハリン島における戦争と境界変動にともなう歴史を再構成したものである。

また、科学研究費補助金(基盤研究B)「19~20世紀北東アジア史のなかのサハリン・樺太」(研究代表・今西一小樽商科大学教授)との共同研究の成果として、今西一編『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』(小樽商

科大学出版会、2012年)を刊行した。本書は、戦前戦後を通じてサハリン島に居住する朝鮮人の生活実態を、現地聴き取り調査と文献調査をあわせて用いながら、日露韓の研究者が共同で執筆した成果である。

さらに、『サハリン・樺太史研究』と題した論集を刊行し、その第1集として、松井憲明・天野尚樹編訳『サハリンの植民の歴史的経験』(北海道情報大学、2010年)を発表した。これは、2008年5月にロシア・ユジノサハリンスク市でおこなわれた国際シンポジウムの報告集の翻訳である。同シンポジウムは、本研究を組織するきっかけとなり、またその後継続される日露国際共同研究の発端となったものである。

定期的な国際シンポジウム・研究会の開催による日露間の共同研究は着実に進展した。「アントン・チェーホフとサハリン島」(2010年9月、サハリン国立大学)、「日本とロシアの研究者の目から見る日露戦争とサハリン島」(2010年10月、北海道大学・小樽商科大学)、「海峡をまたぐ歴史」(2011年8月、稚内北星学園大学)のほか、関連研究者の日本滞在時に開催した研究集會も含め、サハリン島史研究に関する国際的なネットワークは、英語圏の研究者も含め、強固なものとして確立した。

こうしたネットワークは、現地調査においても大いに有利に働いた。各分担者がサハリン、ウラジオストク、モスクワなどでの資料調査を実施するにあたっては、現地研究者からの多大な協力が得られ、新史料の発掘を多数おこなうことができた。

本研究は、重層的な視角からの通時的・共時的地域史研究のための方法の構築、という方法論的課題も掲げていた。そのために、近年隆盛をきわめている帝国論研究者を中心に、学際的な共同研究を組織し、方法論的検討をはかる場を積極的に設けてきた。具体的には、「帝国日本研究の方法と課題」(2011年

12月、北海道大学・小樽商科大学)、「植民地社会の比較史」(2012年8月、北海道大学)などのシンポジウムを開催し、単なる地方研究にとどまらない、方法論的普遍性を備えた地域研究のモデル構築を進めた。その成果は、2冊の論文集に反映され、また今後の継続的研究にも生かされることになる。

また研究の基礎となる資料基盤の構築にも大きな成果がみられた。北海道を中心に所蔵される貴重な史料、とりわけ、樺太史研究の基本史料である『樺太日日新聞』については、本研究を用いてデータ化し、道外の研究者が容易に利用できるよう共有化する作業が進んでいる。

研究計画最終年度前年度応募を利用し、平成25年度より本研究は、基盤研究B「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」(研究代表・原暉之)へ引き継がれた。本研究を継続するものとして、論文集第2弾となる保障占領期(1920年代)に関する研究が進展しており、また、第3弾となる日ソ戦争期(1940年代)についても、国際シンポジウム「日ソ戦争後サハリン島・クリル諸島における引揚と移住」(2013年10月、札幌市)を開催し、研究の橋頭保を築くことができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計22件)

井竿富雄、「同じ立場・違う認識」、『七隈史学』、査読有、第16巻、2014年、67-75頁

David Wolff, “Japan and Stalin's Policy toward Northeast Asia after World War II”, *Journal of Cold War Studies*, refereed, Vol. 15 No. 2, 2013, pp. 4-29

竹野学、「保障占領下北樺太における日本人の活動(1920-1925)」、『経済学研究』、

査読無、第62巻3号、2013年、31-48頁

原暉之、「日露戦争期のサハリン難民とロシア政府の救恤政策」、『ロシア史研究』、査読有、第91号、2012年、3-22頁

井潤裕、「城下町としての豊原：豊原は本当に「小札幌」だったのか?」、『サハリン・樺太史研究』、査読無、第1集、2012年、47-61頁

井潤裕、「占守島・1945年8月」、『境界研究』、査読有、第2号、2011年、31-64頁、

神長英輔、「コンブの道：サハリン島と中華世界」、『ロシア史研究』、査読有、第88号、2011年、64-77頁

田村将人、「1912年、サハリン先住民と研究者、行政の三者に関するメモ」、『北海道開拓記念館紀要』、査読無、第39巻、2011年、117-124頁

井竿富雄、「シベリア出兵におけるスペイン・インフルエンザの問題」、『山口県立大学国際文化学部紀要』、査読無、第17巻、2011年、1-12頁

三木理史、「20世紀における樺太論の展開」、『サハリン・樺太史研究』、査読無、第1集、2010年、16-19頁

塩出浩之、「日本人樺太植民者の政治的帰属」、『サハリン・樺太史研究』、査読無、第1集、2010年、20-23頁

竹野学、「戦前期樺太における商工業者の実像：豊原商工会議所の活動を中心に」、『サハリン・樺太史研究』、査読無、第1集、2010年、106-111頁

[学会発表](計28件)

神長英輔「樺太のロシア人 1905～1948年：国立サハリン州歴史文書館の日本語史料から」(ロシア語) 全ロシア学術会議「極東境界領域におけるロシア」、2013

年 11 月 22 日、チェーホフ『サハリン島』博物館（ロシア）

Hiroshi Itani, “Sakhalin, Kunashir, Yonaguni, and Tsushima: Current Situations in the Japanese ‘border’ regions,” Western Social Science Associations: ABS, April 13, 2013, Grand Hyatt Denver (USA)

David Wolff, “Sugihara Chiune: The Harbin Years,” Workshop on “Sugihara between World War and Cold War, February 25, 2013, University of Helsinki(Finland).

Hiroshi Itani, “Happy Days after the Happy End?: The Modern History of the Kuril Islands,” BRIT XII, November 20, 2012, 東西大学（韓国）

神長英輔, 「19 世紀後半国際コンブ交易におけるサハリン島と中国」(ロシア語) 国際学術会議「サハリン州: 歴史、現代、未来」, 2012 年 10 月 17 日、サハリン国立大学（ロシア）

原暉之, 「ロシアの大戦・内戦とウラジオストクの日本人居留民」, シンポジウム「植民地社会の比較史」, 2012 年 8 月 18 日、北海道大学（札幌市）

塩出浩之, 「ヒトの移動とコロニアリズム：帝国日本を中心に」, シンポジウム「帝国日本研究の方法と課題」, 2011 年 12 月 17 日、小樽商科大学（小樽市）

原暉之, 「サハリン難民とロシア政府の救恤政策」, ロシア史研究会 2011 年度大会, 2011 年 10 月 23 日、青山学院女子短期大学（東京都渋谷区）

田村将人, 「日露戦争とサハリン先住民・樺太アイヌ」, ロシア史研究会 2011 年度大会, 2011 年 10 月 23 日、青山学院女子短期大学（東京都渋谷区）

塩出浩之, 「移民と植民の政治史」, 日本政治学会 2011 年度研究大会, 2011 年 10 月 8 日、岡山大学（岡山市）

越野剛, 「現代ロシア文学における中国

イメージ」(ロシア語) 中国ロシア文学会, 2011 年 9 月 11 日、北京外国語大学（中国）

Masato Tamura, “Mobile Border and Indigenous People: The Karafuto Ainu,” BRIT XI, September 7, 2011, University of Geneva(Switzerland)

池田裕子, 「皇太子の樺太行啓」, 国際シンポジウム「海峡をまたぐ歴史」, 2011 年 8 月 28 日、稚内北星学園大学（稚内市）

竹野学, 「保障占領期北樺太における日本人の活動」, 国際学術会議「アントン・チェーホフとサハリン島」, 2010 年 10 月 22 日、サハリン国立大学（ロシア）

池田裕子, 「第二次大戦期樺太の教育政策」, 国際学術会議「アントン・チェーホフとサハリン島」, 2010 年 10 月 22 日、サハリン国立大学（ロシア）

井濶裕, 「樺太における製紙業の形成と発展」, 国際学術会議「アントン・チェーホフとサハリン島」, 2010 年 10 月 22 日、サハリン国立大学（ロシア）

三木理史, 「日露戦争後環日本海地域のなかの樺太」, 国際学術会議「アントン・チェーホフとサハリン島」, 2010 年 10 月 22 日、サハリン国立大学（ロシア）

原暉之, 「日露戦争前後のサハリン島：古い資料と新しい方法」(ロシア語) 国際学術会議「アントン・チェーホフとサハリン島」, 2010 年 10 月 21 日、サハリン国立大学（ロシア）

〔図書〕(計 18 件)

塩出浩之, 岩波書店、大津透ほか編『岩波講座日本歴史 15』, 2014 年、165-201 頁

神長英輔, 山川出版社、中島毅編『新史料で読むロシア史』, 2013 年、143-163 頁

田村将人、勉誠出版、蘭信三編『帝国以後の人の移動：ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』、2013年、209-248頁

ウルフ・ディビッド、東京大学出版会、塩川伸明ほか編『ユーラシア世界5：国家と国際関係』、2012年、207-225頁

三木理史、小樽商科大学出版会、今西一編『北東アジアのコリアンディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』、2012年、341頁

三木理史、塙書房、『移住型植民地樺太の形成』、2012年、420頁

原暉之編、北海道大学出版会、『日露戦争とサハリン島』、2011年、411頁

原暉之、岩波書店、和田春樹ほか編『東アジア近現代通史4 社会主義とナショナリズム』、2011年、43-65頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://sakhalinkarafutohistory.com>

(サハリン・樺太史研究会ホームページ)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原 暉之 (HARA, Teruyuki)

北海道大学・名誉教授

研究者番号：90086231

### (2) 研究分担者

井竿 富雄 (IZAO, Tomio)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：10284465

池田 裕子 (IKEDA, Yuko)

稚内北星学園大学・情報メディア学部・准教授

研究者番号：90448837

井濶 裕 (ITANI, Hiroshi)

北海道大学・スラブ研究センター・学術研究員

研究者番号：10419210

ウルフ・ディビッド (DAVID, Wolff)

北海道大学・スラブ研究センター・教授

研究者番号：90435948

神長 英輔 (KAMINAGA, Eisuke)

新潟国際情報大学・情報文化学部・准教授

研究者番号：40596152

(平成23年度より研究協力者→分担者)

越野 剛 (KOSHINO, Go)

北海道大学・スラブ研究センター・准教授

研究者番号：90513242

塩出 浩之 (SHIODE, Hiroyuki)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：50444906

竹野 学 (TAKENO, Manabu)

北海商科大学・商学部・准教授

研究者番号：00360892

田村 将人 (TAMURA, Masato)

札幌大学・学術交流オフィス・専門員

研究者番号：60414140

三木 理史 (MIKI, Masafumi)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：60239209